

エミール・ゾラ著『ナナ』におけるナナの娼婦像

田野倉美里

はじめに

エミール・ゾラの『ルーゴン・マッカール叢書』（1871-1893）第9巻『ナナ』（1879）の主人公ナナは、前作の『居酒屋』でジェルヴェーズの娘として登場する。このナナという女性は、「宿命の女」の典型であり、当時の娼婦の典型とも言えるような人物像となっている。しかし、ゾラ作品にはナナの他にも多くの娼婦が登場しており、娼婦という職業の多様性が窺える。そして、ゾラ自身も、自身の物語世界について「4つの世界」と「特殊な世界」¹を区別し、娼婦という存在は後者である「特殊な世界」の住人であるとしている。また、本作に登場するナナという存在はアレクサンドル・デュマ・フィスが1885年に発行した小説の題として創った造語である半社交界（ドゥミ・モンド）高級娼婦として物語の中で活躍する。その姿は、「4つの世界」とされる「民衆」「商人」「ブルジョワジー」「上流階級」の全てが交わる通過点のようであり、それぞれの登場人物達はナナを通して葛藤し、憎しみ合い、破滅への道を辿っていくようにも見える。本稿では、エミール・ゾラ著の『ナナ』におけるナナという存在を娼婦としてではなく第二帝政の表象として捉えることでゾラが込めたメッセージを考察する。また、ナナの様子をナナ個人ではなく、群衆の中でのナナや様々な階級の男性との関わりにおいて論じる。

ナナが高級娼婦として振る舞う時代背景はナポレオン三世の時代の第二帝政期であり、ナポレオン一世の時代とともにボナパルティズムと呼ばれている。そして、保護貿易主義から自由貿易主義に転換し、パリの大改造や国土の整備そして、近代銀行の整備など盛んに改革が行われてきた時代である。その中で、大衆はうごめき、様々な人間模様が産業革命の完成とともに繰り広げられてきた。エミール・ゾラが残した当時の風俗や劇場等の様子を詳細に描写と、

草案 (édauche) は、現代において、様々な分野において大変貴重な資料となっている。本稿では、エミール・ゾラの『ナナ』における主人公ナナを軸に作者が描こうとした娼婦像をゾラの過去の手紙や記事と、パラン＝デュシャトレの著者を基に考察する。

1, 19世紀の売春

19世紀の売春の歴史を辿るにあたって、パラン＝デュシャトレの著書は、示唆に富んでいる。本書によると、立法府により売春婦と規定されるのは、再犯、あるいは法律にふれるいくつかの特殊行為の併合罪。公然たる事実。逮捕および密告者や警察官以外の証人によって証明された現行犯。²であると記されている。また、本書によると、当時世間が恐れていた汚物と瘴気に対する脅迫観念を懸念しており、男は売春婦がいなければ「欲望を抱いて、あなたの娘を、あなたの召使いを墮落させ、トラブルを引き起こすだろう」³と書いている。このように、売春婦とされる人々は社会において秩序を保つために必要とされており、私達が普段使用する生活水等が流れる下水を再生させるために使用される処理センターのような役割であるとされる。故に、一重に売春とされる行為は男たちの欲望や瘴気を浄化する機能を持ち合わせていたことは事実である。また、その反面、性行為というのは混乱を招くものとしても考えられており、それらの行為を主として職業とする女性はある種の秩序を守っていなければならないし、性病を客にうつさないために徹底した指導が必要である。なぜなら、売春の主たる原因の一つとして、家庭内での暴力や不安定さ、そして、自身の非行による逃避により、パリへと甘い言葉に誘われてきた田舎の少女達が身寄りもなく、金もなくなったところで、パリという都会に捨てられた場合、優しい言葉で語りかけ、一時的にでも寄り添ってくれる存在が突然により、心身ともに疲弊しきった少女達は言いなりになってしまうような境遇が多いからである。

前述したように、ナナは『居酒屋』にも登場する。そこでは、父親であるクーパーが不慮の怪我をしてから、働くことを拒み、酒に暴力と家庭環境は一気に

どん底へと落ちていった。そんな折に内縁の夫であったランチエが現れ、居候として過ごす中で母親であるジェルヴェーズと、ランチエが性行為をしている場面を娘であるナナがたまたまみてしまう。ナナは、そんな家庭環境に嫌気がさし、娼婦として生きていくことを決めるのである。

ゾラ自身も 1881 年 2 月 21 日の『フィガロ』紙に売春婦の家庭環境や貧困により追い詰められ余計悪循環に陥ってしまう様が述べられている。

両親の家では生活がますます耐えがたくなる。食べるパンもろくになく、毎晩殴り合いだ。しばしば彼女までがついでに殴られる。とりわけ彼女を絶望させるのは、いつも同じ服を着て、しょっちゅうそれを繕わなければいけないことだ。下品な言葉や、貧困や、不潔さにもうんざりしてきた。美しい娘に特有の優雅さが現れだし、贅沢と幸福な生活を渴望するようになる。もはや無知な少女ではなく、幼い頃から精神が荒廃し、義務もない彼女は、単に若さが生みだすだけのさまざまな欲求を何ひとつ満たせないことで苦しむのである。⁴

この記事に掲載することによりゾラは、娼婦が環境により形成され、多くの娼婦が似たような境遇を送っていると指摘していると捉えることができる。また、少女達の劣悪な環境を世間に知らしめることにより社会全体の意識の改革するだけではなく、貧困で苦しんでいる者達も自分の環境を客観視できるのではないだろうか。そして、ゾラの調査に基づくこのような考えは、ナナの設定に反映されていると考えられる。

2, ナナにみる娼婦像

『ナナ』においてナナは多くの男たちを魅了し、女優としてデビューし、そして高級娼婦になる。しかし、物語の後半では街娼にまで転落する。ナナは、売春婦にも階級があり、ナナはそれらを一通り経験しているのである。また、エミール・ゾラのナナにはモデルとなった人物がいるとされており、その一人

とされているのがコーラ・パールである。⁵ゾラがコーラ・パールなどをモデルとする意図は、当時主流だったロマン主義的な神話として表現するバルザックの『人間喜劇』のエステルやコラリー等のイメージを払拭することにあったと考えられる。実際にゾラは作家、評論家でもあり、ゾラ夫妻の親しい友人であるアンリ・セアール宛に何通か『ナナ』で厳密な情景描写を行うために、細部について質問している。その中でも『ナナ』の14章の天然痘で亡くなる場面の参考にしたであろう箇所を引用する。

雪がなかなか解けない場合、ここには最終章を書くのに必要なメモがありません。グン・トテル（パリのホテルで、ナナはそこで死ぬという設定）の上層階に、大通りに面した部屋があるかどうか知りたいのです。あまり高くない部屋、まあそれなりの部屋で、値段家具の配置、ほぼ網羅的な叙述、窓からおよそ何が見えるか、下の通りから何が聞こえてくるか、それを知りたいのです。（中略）普通の天然痘で死んだ女の顔がどのようになるか、正確で、科学的で、ごく詳細な記述が必要です。どうぞよろしく。⁶

『ナナ』においてこの場面では、従来 of 娼婦を神話的に表現するのではなく、醜く腐敗していく姿を描こうとしているのが窺える。特に、梅毒などの性病ではなく、治癒したとしても顔に醜い瘢痕が残る天然痘でナナが亡くなる場面をゾラが描こうとしているのも意味があるように思える。天然痘という伝染力が非常に強く主にヒトからヒトへの飛沫感染や、体液や汚染された寝具・衣類からの接触感染も起こるとされている病を表象させつつ、ナナが触れる人、関わる人全てを破滅へと導いていく生き様を表現していると捉えることができるからである。また、容姿が著しく損なわれ、顔面から始まって、四肢、手掌足底、全身に広がり、当時は死にいたる疫病として恐れられていた天然痘によってナナが亡くなることには、娼婦としての死ではなく、普通の女性として亡くなることを意味しているように思われる。『ナナ』では、高級娼婦と街婦になる。『居

酒屋』で描かれるようにナナは、14歳頃から身体を売り人生のほとんどを娼婦として生きてきた。ナナは、顔や体が腐るように亡くなる。そして、死んでもなお、周囲の人々に感染させる可能性がある病を設定することで、普通の少女であったナナが周囲の環境や運命に振り回され娼婦になったことが分かる。また、男たちがナナを表現する際に使用する悪魔でも、悪女でもないということが分かる。

そして、最終章のまるでナナの死により第二帝政が終焉を迎えるような描写において、第二帝政の産業革命や、鉄道の整備、そして多くの産業が急速に成長し、文明が発展し煌びやかな時代であった一方、女性が商品として価値を持ち始め、管理される時代であったのは事実である。故に、人の目に触れられない職業の者や、時代の狭間に取り残されたもの、一方的に搾取され続けている者が存在するのだ。

また、娼婦という存在は男性の性の捌け口として、または、ストレスを発散する為に様々な職業の者が利用している。売春の職業に従事する者の苦しみは見て見ぬふりをされてきた。その中で、様々な職業の者たちが娼婦の身体の中を出入りすることにより、娼婦は消費されていく存在であったということだといえよう。故に、『ナナ』に、登場する男たちがナナに破滅させられたと述べられているが、ナナを腐らせた加害者は男たちであると捉えることもできる。そして、見て見ぬふりを続けた世間であり、社会的弱者の救済をせずに、生きるために売春をするしかなかった者たちの状況を直視せず、利用だけして掃き溜めの塵のように捨ててきた者たちであるといえる。

ここで、世の中から娼婦をいなくさせるのは不可能であると述べている。19世紀の売春の歴史において売春学の創始者であるパラン＝デュシャトレは、売春を禁止にするのではなく、公娼制度によって管理することが大切であると述べている。それは、「娼家に住み込む番号つき娼婦」「鑑札もちの街娼」「兵士相手の娼婦」「場末の娼婦」「ピエールズ」（工場現場の近くで客引きする下級娼婦）に分類し、詳細に描写している。また、パラン＝デュシャトレの考察をパラン＝デュシャトレ研究の第一人者であるアラン・コルバンが言うには、娼

婦というのは一時的な職業に過ぎず、一般の世界に戻り、自分の妻や周囲の女性等に悪徳を伝染させる恐れがあるとされるものであるとしている。

「世間に戻ってくるのだ…彼女たちはわれわれをとり囲み、我々の家のなかに、家庭の中に侵入してくるのだ」⁷

アラン・コルバンは、娼婦という職業を認める一方で、彼女たちが持つ危険性も理解できていたと指摘できる。だが、娼婦という職業を規制し、監視することでそのような危険性を軽減できるのであり、また、理解することこそが抑制に繋がると言うことであろう。しかしながら、当時の一般女性の性教育において直接的なことを教える文化はなかったので、一般女性が娼婦によって悪徳の道へ誘われることを自ら抑制することは難しいであろう。ここで、『ナナ』において、以下のように描写されていた。

滅亡と死をつくる彼女の事業は完成されたのだ。場末街の溝泥から飛び立った蠅は、社会を腐敗させる微菌を運び、ただ男たちの肩に止まるだけで彼らを毒したのである。それは良いことであった。正しいことであった。彼女は自分が属する階級、赤貧洗うがごとき人々や、社会から見棄てられた人々のために復讐したのだ。そして、彼女の性が、殺の野を照らして昇る太陽のように、栄光に包まれて昇り、一面に横たわる犠牲者の上に光り輝くときも、彼女は自分のしていることも知らぬ美しい野獣のような無意識を持ち続け、いつも優しい娘であったのだ。⁸

この場面により、ナナは無意識の中で人々を破滅させたことが分かる。従って、娼婦という職業の人は今まで培ってきた常識の上で生活をしてきただけであり、貴族女性等の性教育や性に疎い人物達が娼婦達とたまたま、生きている世界が交わることがあった場合、もしくは、偶然関わる機会がきた時、今まで周囲の環境や自分で抑制していた性というものに目覚めてしまう恐れがあるわけであ

る。どこか性衝動に憧れていた部分が顔を出すのである。故に、どちらの女性が悪いと言うことではなく、ゾラもバラン＝デュシャトレやアラン・コルバン同様に、娼婦の危険性を理解した上で、彼女たちの無意識という感覚に懸念していたことが窺える。

ナナは、作中で社交界に出入りするようになり上流階級のミュファ伯爵から、下層階級のフォンタンまで手広く関係を持つようになる。そこでナナは関わる人々によって態度も人格までもが変化したかのように振る舞う。高級娼婦として贅の限りを尽くし、自らが男性を選び翻弄する一方で、フォンタンを愛し、懸命に尽し、暴力や罵声を受け入れ、果ては、自らの身を男から選んでもらう街娼にまで身を落としたのだ。ナナはフォンタンに暴力や罵声を浴び、尚且つ金銭まで搾取される中、周囲になんと言われようと愛しているからと主張し、フォンタンと別れることを拒んだ。しかしながら、ナナを大切にしてくれるミュファ伯爵とスタイナーに対しては、拒絶し、冷たくあしらっていた。このことから、ナナは、『居酒屋』において父親から暴力と罵声を浴び、日々声を潜める生活を強要されていた中で、元々の環境はフォンタンとの生活に近いのである。そんな幼少の生活が嫌になり娼婦として成り上がることを決めたにも関わらず、なぜ、フォンタンに追い出されるまでその異常性に気づかないふりをしていたのであろうか。それは、ナナだけが異常なのではなく、このような貧困家庭が抱える心の余裕のなさや、精神的異常から来る暴力や罵声に安心感や慣れが生じてしまうということが伺える。その状況を拒否したとしても、似たような環境に陥ってしまうのである。そこには、自尊心の低さや、強く言われると言い返すことができない自分が存在しているのだ。娘が無意識の中で父親に似た人物に惹かれて言っているのであり、いわばそこにナナの意識は存在しないのだ。ほぼ無意識の中で、それらの処理は行なわれているということであろう。また、ナナのそのような生い立ちがあることにより、娼婦として、様々な階級を自由に行き来することが可能となった。また、ナナという少女を通して当時のパリの娼婦の様子が鮮明に理解できるのである。

次に、前述したナナのモデルの一人であるコーラ・パールとはどのような人

物であったのだろうか。モデルとなった人物を理解することにより、ナナの娼婦像をより明確に理解できると考える。

コーラ・パールは、高級娼婦となり、皇帝ナポレオン三世の弟モルニー公や従兄弟ナポレオン公など、フランス宮廷の要人達の愛人となった女性である。彼女のような女性は、パリの中心部の粋な界限にのみ姿を見せ、そこで愛人の金で高級娼婦としての対面を保つために必要な派手な生活を誇示するのである。

ナナも高級娼婦として皇后の侍従であるミュファ伯爵を誘惑し、財産を乱費し贅を尽くした部屋に住むようになっていった。以下はその様子について描写した場面である。

その頃はナナが増々素晴らしい女となって名声でパリを圧した時期だった。悪徳の方でも更に輪をかけた存在となり、その警沢ぶりや金銭蔑視の風を人もなげにひけらかして、この都会を見くだし、多くの男の財産を公然と湯水のように蕩尽した。彼女の屋敷は、さながら鍛冶場のように輝いていた。(中略) なんびとも、かつてこれほどの気違いじみた濫費を見た者はなかった。屋敷はまるで深淵の上に建てられているようなもので、男たちは、その富と肉体とともに、その名前までそこに呑みこまれ、わずかな塵さえあとに残さなかった。(中略) ラボルデットが平均四十万フランと見つもった暮らしの費用は、増やしたつもりもないのに、この年百万フランにも達していた。ナナもこの金額には吃驚したが、それがどこに消えたのかははっきり言うこともできなかった。男たちは次から次に金を巻き上げられて、死屍累々と横たわったが、彼女の贅沢に地響たてながら屋敷の床下にたえず掘り下げられてゆく穴を埋めることはできなかった。⁹

このように、『ナナ』において、様々な場面でナナが、乱費する場面が見受けられる。しかしながら、上記の描写から分かるように、ナナは贅沢が好きなわけでもなく、物に執着があるわけでもない。コーラ・パールも一時期パリの社交界で人気を一身に集め、多くの男たちから貢がれていたにも関わらず、上流

階級の男は大切にせず、罵倒していたようである。そして最後は、パリを離れ、二度と姿を現さなかったとある。その後は遺体を埋葬するために隣人に毛布を借りなければならないほど困窮していたようである。¹⁰ 以上のように、ナナとコーラ・パールには、様々な共通点があり、どちらも当時のパリでは異色な女性であったことが分かる。それは、男たちには物珍しかったことは間違いないだろう。また、コーラ・パールについて、ピエール・ド・ラノーの『第二帝政下のパリの愛』にて以下のように記されている。

彼女はパリで賢沢極まりない生活を送り、ファンタスティックな浪費に身をゆだねた。彼女は金銭に貧欲だった。だが、これは正しく認めてやらなければならないが、彼女は同僚のもつと目先のきいた女たちの多くがやるような、蓄財や終身年金の獲得が目的でそうしたのではない。彼女はたしかに金を手でむしり取ったが、同時に、それをそのまま風に散らすことを躊躇しなかった。¹¹

これと類似したような表現が上記の引用から、『ナナ』にも存在することが分かる。他にも、ナナの浪費がピークを迎えると言っても良い第13章において、ナナの散財ぶりをゾラは以下のように描写している。

ナナは何かひどく高価なものを見るとすぐ欲しくなり、こうしてたえず花や高価な骨董品を買ってはその辺に置き散らかし、一時の気紛れが高くつけばつくほど、嬉しかった。そのうえ、どんなものも長持ちがしなかった。みんな壊してしまい、彼女の白い可愛い指のあいだで萎れたり汚れたりしてしまった。何だかわからない破片や挟れた切れっ端や、泥だらけの艦稜布が彼女の後ろに撒き散らされて、ナナが通っていったことがすぐ分かった。¹²

前述したようにナナは、豪華なものに興味があったと言うよりも、ただ消費す

ることに意味を見出している。第二帝政下において娼婦として性の対象という消費され続ける自分の不安定な様子を投影したようである。さながら、不安からくる衝動的な買い物が多かったことが窺える。

また、コーラ・パールもナナも、社交界の男性という、一定の階級よりも上の人物達に熱烈な求愛を受けているにも関わらず、両者とも素っ気ない態度を取っていた。だが、そこが人気の理由の一つであったのは事実ではある。名声や階級果ては財産に興味があったわけではなく、ふらっとパリという大都会に現れ、その場を席卷し欲望の渦を巻き起こしたにも関わらず、来たときと同様にふらっといなくなるのである。何がしたかったのかと感じてしまうが、ただ言えることは両者とも当時的高级娼婦としては珍しく、品も教養もなければ、洗練された女性ではなかったのである。それが、逆に目を引いたのであるということだ。社交界という場に現れなければ、そこら辺にいるその他大勢の下級娼婦と何ら変わらなかったはずである。いわば、その場にいた社交界の男性達が勝手に創りだした女性像の一人であると考えられる。すなわち、ナナも、コーラ・パールもありのままの姿で登場した結果、飾らない様子が受け男たちからの様々な欲望を受けることとなってしまったのである。その求められるがままに演じ始めた途端に手のひらを返したように悪女であると批判を受けていく。それは、素人感が好みであったということであり、演じられたある種の歪な姿というのは彼らにとって食指が動くものではなくなったということであろう。よって、最初から最後まで、被害を受けていたのは、ナナとコーラ・パールであると考えても良いだろう。

3、当時の娼婦の教育環境

パラン＝デュシャトレは、娼婦になる多くの者は家庭環境に問題があり、そのような環境こそが娼婦をつくる要因だと考えている。故に、本章では、多くの娼婦が経験する過程での教育や環境、被害をパラン＝デュシャトレの著書『19世紀のパリの売春』を参考に、ナナがなぜ娼婦にならざるを得なかったのかを考察する。

パラン＝デュシャトレによれば、売春をしなければいけなくなる原因はいくつか存在しており、その一つとして、想像できないほどの貧困があるという。これは、『ナナ』においてもそうであるように、『居酒屋』の設定にも当てはまる。ナナが売春を始めた要因として『居酒屋』で登場した幼少期のころに、父親が怪我をし、そこから怠け癖が就いた父親が働かなくなり、貧困に陥ってしまったことが上げられる。また、次の要因として、パラン＝デュシャトレは、虚栄心と華美な衣装を身にまとして人目に立ちたいという感情があるという。これについては、特にパリにおいて華美な衣装を着ることにより、一時的に生まれた身分から解放させてくれるからであり、当時のパリにおいて継ぎはぎだらけの服装は恥ずかしいものであった。それ故、華美な服装への憧れが強くなっていった。これも、『ナナ』において、ナナが高級娼婦として成功していくにつれ、常に服装も貴族女性のような華美なものを身に付けるようになったことから、そう捉えることができる。印象的であるのが、第13章においてナナの様子である。彼女はブローニュの森において、そこで重要な地位としてみられる場面である。以下に引用する。

公爵夫人たちは互いに目顔で彼女を示しあい、成金夫人たちは競って彼女の帽子を真似た。時々、彼女のランドー馬車は、ヨーロッパを自己の金庫に収めた財政家や、太い指でフランスの喉もとを締めつけている大臣たちの豪勢な馬車の列を止めて通っていった。ナナはブローニュの森のこの社交界の常連となり、そこに重要な地位を占め、世界じゅうの首都に知れわたって、すべての外国人たちに求愛された。¹³

この場面においてナナが幼少期華美な服装を着る者に馬鹿にされていた立場が逆転し、真似される立場となったことが分かる。ナナの中において幼少期からの貧困から華美な服装を着ることができなかったコンプレックスから、華美な服装や豪華な暮らしは憧れであったことが理解できる。そして、上記にあるゾラの描写は、フランス社会への皮肉であると受け取れる。それは娼婦であるナ

ナを服装により人々が讃える様子を描くことで、実に滑稽であると分かるからだ。

他にも、家庭内の暴力や、家庭環境の劣悪さ、そして、親の放任も理由としてあると言われている。これにおいても、ナナは全て経験しており、当時ナナが娼婦として家から出て行こうと思った理由としては十分であるといえる。

最後に

ゾラは『ナナ』を執筆するにあたり、娼婦の実態を忠実に描写し、そして、ナナという少女に娼婦のあらゆる娼婦の要素をナナに体现させたことが分かる。また、社会がこれにより娼婦に関心を持ち、彼女たちの生活の改善を促す意図があるのも事実である。『ナナ』を通して、様々な娼婦の在り方をみる中で、ゾラが描こうとしたナナは全ての娼婦の集合体であり、貴族とナナの関わりをみることにより、貴族社会の歪みも明らかになったと考えられる。

注

- ¹ 小倉孝誠著 『ゾラと近代フランス 歴史から物語へ』 白水社 2017 年を参考。
- ² アラン・コルバン著 『娼婦 上』 内村留美子、国領苑子、門田真知子、岩本篤子訳 藤原書店 2010 年
- ³ アラン・コルバン著 『娼婦 上』 内村留美子、国領苑子、門田真知子、岩本篤子訳 藤原書店 2010 年 P. 33
- ⁴ 小倉孝誠、菅野賢治編訳・解説 『ゾラ・セレクション第 10 巻 時代を読む 1870-1900』 藤原書店 2002 年 P. 15
- ⁵ ナナのモデルは複数人いるが、今回はナナと境遇がよく似ているコーラ・パールのみに着目することで、よりナナの娼婦像が明らかになると考えた。
- ⁶ 小倉孝誠編訳・解説・有富智世 『ゾラ・セレクション第 11 巻 書簡集 1858-1902』 高井奈緒、寺田寅彦訳 藤原書店 2012 年 P. 164
- ⁷ アラン・コルバン著 『娼婦 上』 内村留美子、国領苑子、門田真知子、岩本篤子訳 藤原書店 2010 年 P. 31
- ⁸ エミール・ゾラ著 『ナナ』 川口篤、古賀照一訳 新潮社 2013 年 P. 683
- ⁹ エミール・ゾラ著 川口篤、古賀照一訳 『ナナ』 新潮社 2013 年 P. 614
- ¹⁰ 鹿島茂著 『怪帝ナポレオン三世―第二帝政全史』 講談社 2004 年 P. 390
- ¹¹ 鹿島茂著 『怪帝ナポレオン三世―第二帝政全史』 講談社 2004 年 P. 391
- ¹² エミール・ゾラ著 川口篤、古賀照一訳 『ナナ』 新潮社 2013 年 P. 614
- ¹³ エミール・ゾラ著 『ナナ』 川口篤、古賀照一訳 新潮社 2013 年 P. 646

参考文献

- アラン・コルバン著 『娼婦 上』 内村留美子、国領苑子、門田真知子、岩本篤子訳 藤原書店 2010 年
- アラン・コルバン著 『娼婦 下』 内村留美子、国領苑子、門田真知子、岩本篤子訳 藤原書店 2010 年
- アレクサンドル＝パラン・デュシャトレ著 アラン・コルバン編 『19 世紀パリの売春』 小杉隆芳訳 法政大学出版局 1992 年
- 尾崎和朗著 『若きジャーナリストエミール・ゾラ』 誠文堂新光社 1982 年
- エミール・ゾラ著 『居酒屋』 古賀照一訳 新潮社 2006 年
- エミール・ゾラ著 『ルーゴン・マッカール叢書 第九巻』 小田光雄訳 論創社 2006 年
- エミール・ゾラ著 『ナナ』 川口篤、古賀照一訳 新潮社 2013 年
- 小倉孝誠編訳・解説・有富智世 『ゾラ・セレクション第 11 巻 書簡集 1858-1902』 高井奈緒、

寺田寅彦訳 藤原書店 2012 年

小倉孝誠著 『恋するフランス文学』 慶應義塾出版会 2012 年

小倉孝誠著 『ゾラと近代フランス 歴史から物語へ』 白水社 2017 年

加賀山孝子著 『エミール・ゾラ断章』 早美出版 2001 年

鹿島茂著 『怪帝ナポレオン三世—第二帝政全史』 講談社 2004 年

鹿島茂著 『パリ娼婦の館 メゾン・クローズ』 角川出版 2014 年

ジャック・ロシオ著 阿部謹也、十浪博訳 『中世娼婦の社会史』 筑摩書房 1992 年

宮下志朗、小倉孝誠編者 『いま、なぜゾラか—ゾラ入門』 藤原書店 2002 年

フィリップ・プリンス監督 『19 世紀文豪のパリ 100 年 1814-1914』 DVD 2003 年

Paul Alexis, Zola, Maisonneuve Larose, 2001

Les carnets d'enquêtes Carnets d'enquêtes Une ethnographie inédite de la France,

Présentation d'Henri Mitterand ,Terre Humaine/Plon 1993